

## 新しい古代韓日関係史にむけて

**金泰植** これからは、今後古代日韓関係史をどのように研究していくのか、その共同研究の方向であるとか、研究に対する展望、問題点を少し議論してみます。これにつきましては、佐藤先生が話題提供を用意していらっしゃいましたのでお願いいたします。

**佐藤** 午前中の座談会でのお話も含まれますが、三点あります。

第一点は、古代の東アジア交流史上の概念の共通化の問題です。古代の東アジアの交流史をめぐっては、さまざまな概念が研究者それぞれの思惑によって使われている面があり、共通の対話が困難な場合があると思います。例えば、国家の概念も研究者によってそれぞれ違い、二国間の関係でも「経営」「支配」「占領」「勢力」「影響力」「軍事的支配」「関係」というようなさまざまな概念が、それぞれの思惑で使われる場合があり、あるいは「人力売買」とか「傭兵」の概念も同じ実態をいろいろに表現する場合もあり、それぞれの言葉で違う実態を指す場合もあるのではないかと思います。そういう用語について、必ずしも強制的に、こういう意味で使えと押しつけることはできないわけですが、今後は対話する際の共通の用語を確認し合うというようなことが必要ではないでしょうか。

二点目は、古代の東アジアには多角的な国家間の関係があったと思います。古代東アジア諸国の交流史を検討する際、やはり中国を除いて考えるわけにはいかないでしょう。今後は日韓の共同研究だけではなく、日本・韓国・中国、あるいはその他の関係する諸国が同じ共同研究のテーブルに着き、多角的に検討する必要があるのではないのでしょうか。

三点目は、新しい出土文字資料や発掘調査成果をこれからどのように共同研究していくかという問題です。木簡などの新しい出土文字資料や、栄山江流域の前方後円墳や倭系遺物など新しい発掘調査成果は、日韓両国にとっての新しい歴史資料であり、これらを両国で共同研究するということによって、今後の研究対話がより進んでいくのではないかと考えられます。『日本書紀』の場合と同様、それぞれの歴史資料が持つ情報をいかに客観的にとらえるか、その方法論の過程から共同で検討し合うことによって研究が進んでいくのではないのでしょうか。

昨日、慶尚大学校の趙榮濟先生も、「考古学的には文化交流の歴史を研究することに意味がある」と言っておられました。文献史料に見られる国家間の外交や政治的な関係だけではなく、土器や武器の作り方、漢字文化や仏教文化の受容の問題など、もう少し文化的な関係についての共同研究を今後は進める必要があるのではないかと私は考えます。そういう未来志向の共同研究の場には、考古学研究者、仏教史研究者、美術史研究者、あるいは両国の国語学研究者にも参加していただきたいと思っています。今回の歴史共同研究は、まだ入り口の段階であり、今回の私たちの努力の上に次の世代がより有効な共同研究を続けていってほしいと期待しています。

**金泰植** 佐藤先生のお話をお聞きし、私からは、私たちが2年半の間行ってきた共同研究を少し反省する意味で、一言申し上げようと思います。

これまで日本側の委員の先生方と共同研究をし、しばしばお会いしました。そして互いの国で多くの遺跡も見てきました。しかし、金鉉球先生のように日本史専攻の方ならともかく、盧

重国先生や私のように韓国史専攻の者には、日本古代史は全く分からない分野でしたので、その状態で日韓関係史へ入ったのは、あまりにも性急すぎたのではないかという思いがあります。

もう一つは日本側の先生方と対話しながら感じたことですが、私たちに劣らず日本の先生方も韓国古代史について理解なさっていない部分もあり、対話がうまく進まないところが多かったと感じます。ですから、互いの国の古代史について最近の研究成果などをもっと長期間にわたって話し合い、お互いの共感を得られた上で韓日関係史について論議したのであれば、このような試行錯誤を重ねずとも対話が進んだのではないかと思います。将来もこのような共同研究が続くのであれば、もっと長い期間を費やし、もう少し広い分野にわたって共同研究がなされるべきで、その努力なしに研究成果を性急に求めることは難しいのではないのでしょうか。ですから、佐藤先生がおっしゃられたように、概念に対する共通の理解であるとか、韓国・日本・中国の共同研究とか、発掘調査成果を共有するというような展望は、私が今申し上げたような基盤の上になされなければならないと考えます。

**濱田**

まず、古代史で用いられる用語や概念ですが、近代の歴史、特に国家間の関係史から生まれてきた概念を使わざるを得なかったということから生じる問題は、まさに現代に直結して理解されていくという面がありますので非常に難しい問題であると感じています。先ほど出てきた韓半島南部経営説ですが、どんな事態を「経営」「支配」と言うのか難しいところです。やはり個別的な検証を積み重ねていった上で、大枠の体系化された概念ができていくのでしょうか。

『日本書紀』について、金鉉球先生の見解は「百済と日本国との関係が中心であって、百済を助けるために加耶と日本との関係がある」ということでした。そういう点でも、4・5・6世紀の日韓関係を考えるときは、やはり加耶史の研究というのが非常に大事だと思います。加耶が日韓関係、つまり百済と日本との関係を結ぶ蝶番（ちょうつがい）だと思います。幸いに考古学の研究成果として加耶地域（慶尚南道地域）の発掘調査が非常に盛んで、文字に限って言えば大干の「干」の字を持った土器が出てきたり、6～7世紀になると今度は木簡が出てきたりと、緩やかながらも加耶地域の独自の歴史資料が出てくるわけです。しかし、加耶史の場合は、百済史・新羅史のように参考になる通史がなく、残念ながら体系化されていません。金泰植先生はしっかり研究されて、加耶史の体系をお持ちだと思うのですが、私自身はそうではありませんので、古代日韓関係を考えるときの加耶史の基準、骨格、つまり動かない体系を早く理解しなければいけないというのが反省点です。

**金鉉球**

研究の方法論について、佐藤先生は、用語の概念について研究され、日韓関係だけではなく東アジア世界全体からの見方が必要であるということ、そして新たな資料をどのように取り扱うかという意味のあるお話をされました。濱田先生は、その概念の問題をもう少し具体的にお話しになり、そのためには加耶史の研究が必要であるということで幾つかの方法を挙げられ、意義深いお話をなさいました。

ここで研究の方向性について一言申し上げたいと思います。午前にも申し上げましたが、今、世界がEUをはじめとして地域的間協力や統合の方向へ進んでいることは動かし難い事実です。そのような面では、東アジアの中で韓国・日本・中国も協力していなければなりませんし、現実的に貿易で見ると、相手の2国がどちらとも3位以内に入っており重要な国家として浮き

彫りになっています。それにもかかわらず、現在、韓国と日本の間には、これは我々がこの研究会を始めた理由でもありますが、歴史教科書の歪曲問題があり、韓国と中国の間には高句麗史の問題、日本と中国の間には靖国神社の参拝問題、これも結局は歴史の問題と考えられます、といった歴史紛争が続いています。

私たちが認めるかどうかにかかわらず、結局、人は自分の現在の見方で過去を解釈し、過去をもって現在の自己を合理化しようとするのは、まぎれもない事実であると考えます。そのような面で、中国が高句麗史問題を取り上げたのは、現在の東アジア世界を過去の冊封体制によって臨もうとする姿勢から出たものと考えられ、日本の朝鮮半島経営問題であるとか教科書問題は、石母田さんが話したような、中国を中心とする大帝国主義と日本を中心とする小帝国主義という枠で歴史を見ようということから出たものではないかと考えられます。

しかし今後、東アジア世界は互いに協力していかなければなりません。私たちがここに集まったのもそれが目的でありまして、このような見方で、古代の歴史をもう一度考察する必要があるのではないかと考えます。

概念の問題は、内容が確実になってこそ概念について定まるのですが、結局、自分が考える内容によって概念を設定していますので、先に現在の概念を決めてから中身を検討することは、論理的には合っていますが実質的には逆だと考えます。したがって、「支配」とか「影響力」「経営」という言葉の概念は、当時加耶地域で活躍していたといわれる倭をどのように見るのかという問題から派生する概念であるため、朝鮮半島南部で活躍していた倭の実態を明らかにすれば解決する問題だと考えます。

最後に、日韓の間だけではなく中国を入れて立体的に共同研究をすべきだというご意見は、当然な考えです。しかし、日韓両国関係もおろそかにしてはいけないと思います。両国関係を研究していくことに伴い、三国関係、四国関係へと発展していくのだという考えを持っています。

#### 韓国南部に存在した倭をどう理解するか

**濱田** 金鉉球先生は「韓国南部に活動した倭をどう理解するかというのが非常に大事だ」ということをおっしゃいましたが、金先生は長年の研究を踏まえて、これをどのようにお考えになっているのでしょうか。

**金鉉球** それを私がお答えすると、この研究会は無くてもよかったことになるのですが、濱田先生に聞かれましたので、あえて私の考えを申し上げます。

結局、倭といっても時代によって違いますし、同じ時代でも性格が違うこともあり、一言では言えないと思います。しかし、何か倭について話す場合はその枠というものが重要ですので、これまでの交流の中で現在まで問題となっていた『日本書紀』に登場する「倭」、朝鮮半島南部を経営していたとか支配していたと日本の学者が主張している「倭」の存在を主対象として話をしたいと思います。

私は、4世紀の広開土王陵碑文に登場する倭、『日本書紀』に登場する倭、5～6世紀に『日本書紀』に登場する倭は、大きく見ると性格はそれほど変わらないと考えます。例えば、広開土大王碑文の辛卯年条などは多くの議論がありましたが、404年条に対しては誰も異議を提起し

なかったように考えます。辛卯年条や神功紀 49 年条に現れる倭は、よく検討してみますと性格に違いはないと思います。また、5 世紀のたとえば紀生磐の乱や 6 世紀の朝鮮半島南部を経営したという記事に出てくる倭についても、よく検討してみると性格は一致していると思います。

結論的に申し上げますと、基本的には倭は、百済の要請によって百済を支援する人々であったと考えています。その代価として、『日本書紀』に見られるように、日本に先進文物を提供していた。そのような関係の中で、両国王室の間に血縁的交流などがあったとか、そのような交流も組み合わせあって成り立っていたものと考えます。

**濱田**　　そういう見方は、日本でもあります。

**金鉉球**　　私が知っているところでは、断片的にはそのような話をされる方もいますが、全体的に 4～6 世紀についてそのような話をなさった方はいないのではないかと思います。

**石井**　　もう一度、佐藤先生の提言を基本として考えていきますと、先生が挙げられたこの三点についてはどなたも異論がないと思いますし、先ほど金泰植先生がご自分の反省ということでお話しされたことについても、皆さんが共通して持っている考えだろうと思います。このように歴史研究が細分化あるいは精緻化した現在、すべてをカバーできるという人はいないのではないのでしょうか。

そうした状況の中、これまで 18 回もの共同研究会が開かれていること自体が大きな進歩だろうと私自身は考えています。そして改めて感じますのは、こういう状況であるからこそ文献や文字資料、考古資料などの基本的な史料を改めて見直し、材料を一つずつ積み重ね、議論を共有のものにするための土俵づくりが求められているのではないかということです。

例えば考古資料でいきますと、「栄山江流域の前方後円型古墳の被葬者は倭系百済人である」というような表現がよく使われます。そのような被葬者の問題一つをとっても、どういう遺物あるいは遺跡、そのあり方などからそのような結論が導き出されたのかについて、より広くデータを公開する。そういうことを促進してもらうことを願うのも、この委員会の一つの役目ではないかと私は感じています。

ですから、性急な結論を出すのではなくて、お互いに客観的に議論ができる環境づくりを第一の目標に置くことがよいのではないのでしょうか。例えば「神功紀 49 年条が妥当なのか否か」というような議論ではなくて、そのことも含めた上で客観的な議論のできる場づくりというのを、私個人としては最大限の目標に置いているつもりで研究を進めています。

結局は、やはり基本史料に立ち返るといことで、文献だけではなくて考古も含めて、そうした環境づくりが一番大事なのではないかと感じています。

**金泰植**　　私が先ほど申し上げたことも石井先生の今のご意見と類似した内容だと思えます。私たちがここで性急に日韓関係史の大きな枠組で話をしたので、「日本が朝鮮半島南部を経営した」とか、「それを百済が主導していたのであって倭は付随的であった」というような話になってしまいました。しかし実際は、その対象となっている加耶地域に関する問題は論外だったように思います。これまでの加耶に関する文献や考古学資料などに基づいて言いますと、加耶地域は、百済の影響も倭の影響もそれほど大きく受けていなかったということが分かっています。

ところで、最近加耶地域から出土している 3・4・5・6 世紀の考古学資料の相当数が九州

地域と関連しているという状況があります。ですから、私たちがここで性急に古代日韓関係について大きな結論を出す前に、加耶地域と九州地域の遺跡や遺物状況についてもっと詳しく研究しなければならないと感じるようになりました。

**盧重国** 公式的な座談会は、きょうでほぼ最後だと思います。日韓の研究者がこのように2年以上も共同研究のために会合を持ったことは、ほとんど最初の試みだったのではないのでしょうか。自発的にこのような集まりをこれからも続けられる可能性が大きいと思います。この集まりは日本の中学・高校の教科書問題に触発されて出発しましたが、この研究会をこれまで進めてきて、日韓のこのような学術的な集まりが今後も持続することが非常に望ましいという私なりの結論を得ました。このような集まりが続けば、教科書問題も徐々に改善されるのではないかと考えます。

今後も検討すべき事項は相当多様にあります。これまで私たちは4世紀から6世紀のことを論じてきましたが、その前の1世紀・2世紀・3世紀の歴史も大変重要ですので論議していかなければならないと考えます。

濱田先生が提出された一枚の紙がありますが、これは一枚の紙で言及して終わるのではなく、私たちが共同で取り組むべき事項ではないかと思えます。併せて郡県問題や古朝鮮問題も扱わなければなりません。そして、佐藤先生から出された仏教や漢字文化の受容問題なども、論文の一章で終わるのではなく、共同で研究すべき主題となり得るのではないのでしょうか。

参考までに、今回の会議資料の27頁に行基図が載っています。『三国志』魏志倭人伝によると、朝鮮半島から倭へ行く方向は大体「南へ、南へ、東南へ」となっていますが、今の日本地図を念頭に置くと到底理解できません。しかし、この行基図を見ればある程度その当時の地理観を理解することができると考えます。また、このような地理観で見れば、『宋書』倭伝に現れる渡平海北の舞台である地域も新たに検討しなければならないでしょう。行基は7世紀末から8世紀初の人物ですので、このような地理観を持っていたということを念頭に置いておく必要があるのではないのでしょうか。そういう角度から見ると、1世紀から3世紀の歴史問題を共同研究していく場合にこういう資料を扱ってみることも必要だと考えました。

**佐藤** 盧先生は行基図を使われたのですが、この図を「行基図」と名付けた人がいたので「行基図」と呼んでいるだけで、古代の行基とは全く関係のない図です。恐らく中世以降に描かれた図で、古代のものではありませんので、地理学者も含め日本の研究者は、この行基図から古代の地理感覚を研究することはほとんどしていません。

私は、金泰植先生のご意見に大変共感を覚えました。私も磐井の戦い（磐井の乱）の報告において、九州の地方豪族を例にとり九州地方における国家形成への歩みを論じたつもりです。日本列島の古代史は、倭の大王の歴史に一元的に解消できるものではないと思っています。律令国家の時代であっても、律令国家が支配した領域は北東北の一部までですし、南にしてもせいぜい九州南端までであり、近代の日本国の領域がそのまま古代にあったわけではないのです。

私は、日本列島の古代史を考える場合、大王権力による国家形成への歩みも重要ですが、それぞれの地域の歴史も同じぐらい重要だと考えています。古代の文献史料は国家が編纂したもののなので、どうしても国家中心、あるいは近畿地方中心の歴史像が描かれてしまいがちです。

しかし、それぞれの地域にはそれぞれの古代史があるので、中央国家の歴史とそれぞれの地域の歴史の両方を学んだ上で、それらを総合して日本列島全体の古代史を位置づけたいと思っています。そういう目で見ると、『日本書紀』には「九州の地方豪族である磐井は、高句麗・新羅・百済・加耶からの外交使節を自分の所に呼び込んでいた」「磐井が悪意をもって新羅から賄賂（わいろ）を受け取った」という記載がありますので、九州地方において王国を形成しつつあった磐井は、加耶とも密接な交流を結びながら新羅とも交流し、百済や高句麗の使節も大王のもとには行かせずに自分のもとに呼び込んで、独自の外交関係を築きつつあったのだと思います。

このように地域の古代史を大事に見直すことは、古代における中国の中華思想、あるいは日本の律令国家が持った「小中華思想」を相対化する、客観的に見直す上で意味があると私は考えています。

金鉉球先生がご指摘になられたように、EUなどさまざまな地域連合の動きというのが今日の焦点であるのと同じぐらい、NGO (non-governmental organizations)、今日の国家ではなくてそれぞれの人々がどのように歴史を動かしていくのかということが現代的な課題であると思っています。古代においても、必ずしも国家だけではなくて、それぞれの地域の豪族や民衆たちがどう動いたかということも検討することは、今日的な意味もあると考えています。

### 古代の地理感覚と地図

**盧重国** 佐藤先生は、これが中世に描かれた地図と言われましたが、日本で現存する地図の中で、最初に書かれた地図は何世紀に作られたのでしょうか。

**佐藤** 古代の地図は、荘園の絵図でしょうか……。古代には、個々の地方の地図はありますけれども全国地図は残っていません。

**濱田** 申叔舟の地図が、古いでしょう。

**石井** 『海東諸国紀』ですね。

**濱田** 朝鮮王朝時代の申叔舟の『海東諸国紀』に出てくる日本地図が現在では最も古いものです。

**盧重国** 行基図として知られているこの地図以外に、これ以前の古い地図として日本全体が描かれているものはありますか。

**佐藤** あれば教科書に載っています（笑）。この行基図も載っていません。それは時代が新しいから。

**盧重国** 行基図は何世紀に、中世16世紀ですか。

**石井** 早くて鎌倉時代から室町時代ですよ。13世紀よりもっと下がると思います。

**盧重国** 会議資料28頁の地図「混一疆理歴代国都之図」は1402年ごろ、朝鮮太宗代に作られたものです。ここに見られる日本の地図と前に出てくる地図は、ほぼ同じです。

それより重要なことは、中世までは、現在のように日本を東西という感覚で見えていたのではなく南北に見たということです。もちろん行基図は行基が描いたものではないという可能性は十分にあると思います。それにもかかわらず、中世まで日本人は日本の姿を南北に見るという地理観を持っていたということを考慮すべきだと考えます。

**佐藤** 日本の古代では「四方の国」とか「東山道」「東海道」という言葉があり、律令国家では今

の関東地方を「東」と認識し、九州のことを「西海道」と呼んでいます。ですから、やはり私は8世紀の日本の律令国家は今の関東・東北地方を「東」、九州を「西」と認識していたと思います。北を北陸地方と見て、四国や今の和歌山県のことを南海道として「南」というように称しています。それが8世紀の律令国家の方位感覚だと思います。

『日本書紀』には四方將軍というのがありますが、8世紀はじめの『日本書紀』の考え方は、東西南北の方位を律令国家と同じように考えていたようです。あとは5世紀の『宋書』に見られる「平西將軍」ですが、これについては、きょうは触れないことにいたします。

この行基図と呼ばれている図には、都が山城にありますね。行基が生きた時代には都は平城京（今の奈良県の大和）にありました。これは行基が生きている時に描いた図では絶対にあり得ません。

**石井** この地図には東西南北が書いてありますか。上が北だと書いてありますか。

**盧重国** 表示はないのですが、叙述されているものが、上から叙述されています。

**石井** これを横にすれば、恐らく西側に中国があるという見方もできると思います。ですから、上を北にする根拠は特にないのではないのでしょうか。

**盧重国** 太宗実録には、28頁の混一疆理歴代国都之図を作る以前に日本から地図を持ってきたと書かれています。韓国の学会では、その時持ってきた地図がこの地図（まずは行基図だと知られている地図）だと理解しています。ですからこの地図と連関させてみると、行基図も南北に見なければならぬと思います。

**濱田** 盧重国先生はご自身の論文との関係で今の行基図のことを佐藤先生にご質問になったと思うんですね。今回のテーマとはずれていて、極めて個別的なものですので、座談会の記録には載せないほうがいいかと思います。

ただ、盧重国先生はこの地図をもって『宋書』の「海北九十五国」を北九州だとおっしゃりたいようですが、そうだとすれば、北九州の海の北には韓半島があるわけですから、かえってこの地図が海北九十五国は朝鮮半島であるということを証明していることになりませんか。

**盧重国** いえ、朝鮮半島ではなく九州となるのです。なぜならば、船に乗っていくと、瀬戸内海を上がって九州を征服することになるでしょう。

**金鉉球** 私は盧先生のほうが少し誤解をしているように感じました。なぜならば、佐藤先生がおっしゃったように、7世紀の律令国家において全国を8国に分け、九州を西海道というように名前を付けたのでしょう。ですから、九州を北でこの地図を北と見るには無理があると考えます。これ以上この話を続けると論議が別の方向へ行く可能性がありますので、このぐらいで終わりにしましょう。

**盧重国** 論議についてはおっしゃる通りですが、それを地図として表す場合、どのように表されるのかという問題でしょう。なぜならば現在、日本にも私が提示したこの地図より早く作られた全体地図はありませんよね。

**金鉉球** そのようなものを離れて、600年代に九州を西海道とこのように認識したのです。

**佐藤** 日本の中世の行基図では上の方に大きな陸地があるのですが、これは韓国ではないのですか。

**石井** 私は、あるいは沿海州だと思いました。ちょうど日本海を挟んだ形で。朝鮮半島と見るかど

ちらかですよ。

**盧重国** 私がこの話を切り出したのは、将来の共同研究で1～3世紀の問題を取り扱う場合、関連すると思ったからです。その時代ですと『三国志』魏志韓伝や倭伝も扱うことになるのですが、普段私が常に疑問に思っている部分で、「対馬を渡って壱岐島を渡り九州まで来た。中国郡県の使臣がその次に邪馬台国まで行くためには、さらに南へ南へ、また海を渡って行く」という表現がありますが、それは現在の日本地図と合致しないのです。その疑問を解決するには、このような行基図や混一疆理歴代国都之図などを参照して当時の地理観で考える必要があるのではないかと。このような角度から申し上げたのです。

### 共同研究の継続について

**金泰植** 本日の座談会で論議されたことをまとめます。これまでこの研究会で日韓共同古代関係史を研究してきましたが、新たな研究ができましたし、また、さまざまな問題点も出されたと思います。このような共同研究はこれからも継続して行われるほうがよいというのは共通の意見かと思えます。日本側では、我々研究委員会からこのような共同研究の継続の必要性を支援委員会に建議したら、受け入れられる可能性はありますか？ 韓国側でも、支援委員会の意見も重要ですが、研究委員会の意見も重要だと考えています。ですから、私たち第1分科研究会でこのような共同研究をこれからも継続するというのを支援委員会に共同で建議することについて、どうお考えでしょうか。

**佐藤** 私は、今回の共同研究はまだ入り口であり、むしろこれから本格的に進められるべきものだと思います。しかしそれは、今回のように支援委員会の依頼を受けて行うということではなく、韓国と日本の研究者の方々が自発的に共同研究をしていくような場であり、今の枠組みの支援委員会のもとにある共同研究委員会がそのまま継続するとは今まで考えておりませんでした。きょう、金泰植先生からそのようなお言葉が出ると思っていませんでしたが、やはり少し形を変えたり、あるいはメンバーを変えたりしたほうがよいのではないのでしょうか。ほかの4先生方のご意見を聞いた上で私も考えたいと思います。

**濱田** 韓国には、古代から近現代までの日韓関係史を研究している韓日関係史研究会という団体があり、論文集が20号近く出ていますね。日本には日韓関係史ということで集まる学会はないですし、そういう研究雑誌もありません。ですから、この研究会の報告書が日韓で共に出ればさまざまな反響があるでしょうし、賛否両論があっても厳しい批判も受けるに違いありません。

私はこの研究会がある種の支援をいただきながら継続ができるかということ、かなり難しいだろうと見ています。しかし、せつかくこの成果を幅広く受け入れてもらいたいですし、あるいはさらに検討するというのも必要です。ですから、少し形を変えて日韓関係史にある程度の絞った、日韓の歴史学界の交流の場が必要だということには共感できます。

金泰植先生や金鉉球先生から午前中に宿題をいただきましたけれども、私も遠からず、私が研究し、かつ構想している古代日韓関係史の通史を書きたいなどは思っています。

**盧重国** 日本側では支援委員会が関係するこのような集まりはほぼ不可能ということですね？

**濱田** 韓国側では第1分科、第2分科、第3分科という方向で、話し合いが進んでいるのですか。

**金泰植** 可能であれば一度支援委員会に建議する必要はあるのではないのでしょうか？

- 濱田** それは金泰植先生だけのお考えではなく、お二人の先生も同じお考えですか。
- 金泰植** はっきりとした決議ということで出てきたのではなく、先生方は大体同じ考えだと思っています。
- 石井** 目前の締め切りに追われているものですから、研究会の継続のことまで考えるゆとりがありませんでした（笑）。私個人としましては、ようやく共同研究の目標が見えてきたという感じは受けていますので、どういう形にせよ、続けることができれば一番よいと思っています。ただ、支援委員会スタイルでもよいのかどうかについての検討の必要はあると思います。
- 濱田** 日韓では日韓歴史家会議があります。個別の問題の検討会議ではなく、歴史学の方向性をどなたかが講演し、出席者がいろいろと質疑・討論するという形式の会議で、歴史理論だとかヨーロッパの新しい歴史学を日韓に紹介するという方向のようです。そういう会もありますので、この共同研究委員会も、どういうメンバーでどういう構成かは別としまして、日韓関係史をテーマとした何らかの共同研究、共同会議の継続というのがあってもよいのではないかと前向きに考えます。
- 佐藤** 私は、今回の共同研究の成果は到達点ではなく出発点だというふうに認識していますので、今の研究会がそのまま継続するかどうかは別として、少なくとも「こういう共同研究の場が今後も何らかの形で続いていくことが好ましい」という提言はしたほうがよいと思っています。新しい支援委員会に関係するような形になるか、あるいは新しい共同研究の場づくりがどんなふうになるかはお任せしますが、それとは別に、せっかくの出会いですので、個人的に別の形で、これからも仲良く時々お会いして共同研究できるような場が欲しいとは思っています。
- 金泰植** では、今後、支援委員会から第二期共同研究をなさいと言われた場合、どのような形態で共同研究が行いましょうか。そのことについての論議を次の対馬会議ですることにはしましょうか？
- 佐藤** ほかの分科会の意向もあると思います。
- 金泰植** では、このような共同研究が今後さらに持続するのであれば、どのように行われることが最も望ましいかにつきましては、次の第 20 回会議で論議することにして、きょうはこれで会議を終わりにしましょう。